

## ●春日部市民文化講座（第2回） 「千利休のわび茶 ～その2」

◆日時：2012年9月26日(水) 11時（ぼぼら春日部6階会議室）～12時

## ■千利休にみる別れの美学

前回の講座では千利休の3つの革命についてお話ししました。3つとは**茶室の革命、道具の革命、点前・所作の革命**です。茶室の革命では、武野紹鷗が確立した草庵四畳半の茶室をさらに縮小して三畳、二畳、一畳半と小さくしていきました。そして、利休のわび茶が確立したのは二畳の茶室・待庵を作ったときに固まったと思えるのです。また、利休が本来は晴れの場に出なかった炉・囲炉裏を持ち込んだのも大きな革命であると思います。何で囲炉裏を茶室に持ち込んだかという、今までは合理的な説明として、ちょうど良いタイミングでお茶が出せるように炉を切ったと言われてきましたが、私の友人の業躰(ぎょうてい)が、「長いこと灰いじりをしているけれども、炭点前をすると背筋が正される」と言っているのです。私は「それは炭点前が死を見つめることだからだよ！」というのです。炭点前というのは、客前に炭を運び、釜を外し、炭を順に注いでいき、最後に白く化粧した化粧炭という石灰をまぶしたツツジの枝炭を置きます。【参考写真：炭点前】千利休は、すべてを捨てて捨てて、最後には自らの命までを捨ててお客様をもてなしたのではないかと、それが「千利休のわび茶」ではないかと思うのです。



## ■利休が愛した茶碗

戦国時代は、明日は無き命の時代でした。ここに私が表千家のお家元宅で見せていただき、お茶をいただきたいと所望したのですが叶わず、写しを求めて手を入れ、今では長次郎の風格に仕上げた茶碗があります。利休所持長次郎作写し「禿(かむろ)」です。

【写真：表千家不審菴HPより】まさに利休さんが愛した茶碗ですね。今日はもう一つ大きなお茶碗を持ってきました。瀬田掃部が愛用した高麗平茶碗のような風格ですが、これは「エリコ」(別名ジェリコ、死海の北西部にある古代オリエントの中でも古い町、世界で最も標高の低い町)で発掘された3500年前頃の土器に、増村先生に赤漆を塗っていただいた茶碗です。利休さんが愛した茶碗というのは、こうした素朴な物だったのです。【増村先生によるエリコの解説：このお茶碗は、当初塩を含んでいて漆が乗りませんでした。そこで水に浸して塩抜きを行い、初めて漆をかけることができたものです。】このお茶碗には、長い茶杓がちょうど良いのです。この長さの茶杓は「掃部形」と呼ばれる大きな櫛先の茶杓が似合いますね。この瀬田掃部もキリシタン大名であり、利休の弟子の一人であります。

## ■守破離

利休百首の最後に「**規矩(きく)作法 守り尽くして 破るとも 離るとても 本ぞ忘るな**」というものがあります。「**守破離(しゅはり)**」と呼ばれる教えなのですが、茶の湯の基本ができ守りつくして、それを破る時期があっても、さらに離れても本を忘れないということです。樂吉左右衛門さんも、「自分は真似をしない。自分が作りたいものを作っているが、守破離を守り続けている。最後は本に戻る。」とおっしゃっているのです。その点では増村先生と相通じるところがあると思います。利休さんが基本としたもの、それが自分の死というものを見つめることであつたら、最後は…。

## ■利休七哲の5人がキリシタン

織田信長の茶頭となった利休には、弟子七人衆というのが居たと、表千家所蔵の「江岑宗左茶書(夏書)」[利休から数えて四代目の家元の覚え書き]に記されています。「利休の弟子七人衆と申は、一番に蒲生飛驒守殿(蒲生氏郷)、二に高山右近、三に細川越中殿、四に芝山監物殿、五に瀬田掃部殿、六に牧村兵部太夫殿、七に古田織部殿、此の内、織部一茶之湯能無御座候、併後にはふへん世に勝申候」と書かれており、7人中5人がキリシタン大名でありました。また、蒔絵で描かれた「**山姥文箱**」と呼ばれる利休所持の手文箱が利休400年忌に表千家から突如発表されました。この山姥と呼ばれた絵は、エデンの園でイブが禁断の木の実を採ろうとしている姿なのですが、この絵は、現在蓋の裏側になっているのですが、制作された当初は表面でした。つまり、キリシタンの品物を利休さんが持っていたのでは、どんな迫害にあうか分からないというので後世のお家元が細工をしたのだと思いますが、正餐式でパンを入れた箱のようです。



## ■利休の死と一畳半の茶室

武野紹鷗が完成した四畳半の茶室における「わび茶」を、利休は三畳、二畳、さらには一畳半にまで凝縮していきました。この一畳半の茶室の半畳に亭主が座り、一畳に客が一人、または二人座る訳です。茶道の中で一客一

亭の点前というものがありますが、亭主と客の1対1の真剣勝負なのですね。一畳半の茶室はそれまであった茶の湯の常識を壊したのです。これは何なのでしょう？ 「死んだ己と己の死を看取る人」の関係とみることはできないでしょうか？ 主客の逆転です。半畳に死を看取る人が座り、一畳に死体となった利休がいるのです。「死ぬことの意義」を見つけたのではないのでしょうか？ 死ぬことの意義とはなんなのでしょう？ キリストの言葉に「一粒の麦もし地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」というものがありますが、まさに利休の死はこれだと思います。利休は秀吉に武士でもないのに切腹を命じられて自刃しました。殺されたのです。しかし、最後まで言い訳もしませんでした。その真意は謎です。前田利家の取りなしも受け入れませんでした。利休は何のために切腹をしたのか、それは全くの謎です。利休の遺偈(ゆいげ)では、「人生七十、りきいきとつ。吾がこの宝剣祖仏共に殺す。提る我が得具足の一つ太刀、今此の時ぞ天に抛つ」(意味: 人生ここに七十年、えい、えい、えい(忽然と大悟した時に発する声)。この宝剣で祖師仏陀も我も共に断ち切ろうぞ。私は手慣れた武器である一振りの太刀をひっさげて、今まさに我が身を天になげうつのだ。)と…。利休さんが命をかけてきた「わび茶」の世界を投げ打ったのです。利休さんは、何のために誰のために死んだのか、それは大きな謎です。

### ■新たな命の芽生えこそがわび！

長い間、千利休の口伝書とされていた「南方録」があります。今は後世に作られた偽書と言われますが、この「南方録」では利休の「わび」を「花をのみ 待つらん人の 山里の 雪間の草の春を見せばや」と藤原家隆の歌で表しました。武野紹鷗の「わび」は藤原定家の歌、「見渡せば 花も紅葉も なかりけり 浦のとの屋の 秋の夕暮」になぞられ、花や紅葉といった華やかな景色はなく、冷たい晩秋の薄暗がりの中に苦屋がひっそりと見えると歌っているのに対して、利休さんは、雪の白い世界が過ぎてほんの少しの雪間に、よ〜く目をこらしてみると新しい命が芽生える姿を「わび」だと言っているのです。冷たい冬が過ぎれば、待ち焦がれている世界がありますよ！と言っているのです。江戸時代の人はずいぶんそう理解したのです。消えゆくものだけでなく、新たに生まれてくる喜びを詠っているのです。炭点前の上手な方の置いた枝炭は、きれいに残るものです。中の炭がすっかりと燃え尽き、外側の石灰の白い部分だけが置いたままに残ります。それは見事なものであり、まさに骨の姿でもあります。

### ■贖い(あがない)の思想

ここからは牧師の話として聞いてください。もし、利休さんがキリシタンでなかったら、弟子7人衆の5人がキリシタン大名というのをどう説明できるのでしょうか。少なくとも、弟子のキリシタン大名からキリスト教のことは聞いて知っていたと思うのです。キリスト教にあつて仏教にないものがあります。それは「贖いの思想」です。贖いとは罪を償い許されるということであり、天国で蘇るという思想であります。利休さんは、すべてを捨て自らの命までも捨てることで贖う、だから「死を覚悟していた」のではないのでしょうか。私は「千利休のわび茶」は、利休と七人衆が話し合つて完成したのではないかと、または七人衆が強く関わっていたと思うのです。この謎を解く鍵が、バチカンに宛てて書かれた膨大な宣教師達の書物の中に眠っているのではないかと思うのです。この謎解きに関わることが出てきたら、利休に対して、利休のわび茶に対して革命的な理解が始まりますね。

### ■一所懸命から一生懸命へ

「わび」とは、戦国時代に死んでいく者同士、生きている者同士がお互いに共感し合う世界があることを言い出しつべになってくださった。凄いことです。皆さんは「いっしょけんめい」「いっしょうけんめい」という字をどう書きますか？ 信長の時代は「一所懸命」です。土地を取るために命を懸けて働いたのです。お茶道具一つが一国になり、それを得るために命懸けて戦いました。利休さんは「一生懸命」です。土地では無く文化のために命を懸けて生き抜きました。そう考えると、私達は「一生懸命」に変えても良いのだと思います。価値観を逆転させたところに、利休さんの凄さがあると思います。一畳の畳に寝かして半畳で看取る、主客逆転です。もてなす側がもてなされるようになったのです。

### ■語らずして語る凄さ！

先ほど、増村先生の話される姿を拝見していて、「自然体」であることに気付きました。人間国宝の先生ですから、ご自身の技についてさまざまなお話があるものかと思っておりましたが、全く語っていただけませんでした。ご自身の人生を自然体で語りながら、ご自身の技量について語らずして語られていらっやいました。凄いことです。我々は、こんなことをやっているよ、知っているよと自慢してしまうのですが、だからどうなの？ 誰から伝えて、自分の意思を表現することができなければ意味がないのです。利休さんは、切腹の時にも「一服一会(いっぷくいちえ)」を貫きました。切腹の立ち会いに来た侍に一碗の茶をもてなしてから自刃して首を出したと言われていました。さあ、皆さんの生き方は如何に！ 死に方は如何に！

利休さんの侘びの真髓は「最後は自らの命までを捨ててのもてなし」だからこそ、全てに一生懸命だったのですね！